

# 斑点米カメムシ類の近年の発生と課題

中央農業総合研究センター虫害防除部 わた  
なべ  
とも  
なり  
中央農業総合研究センター北陸水田利用部 樋  
口  
博  
也

## はじめに

斑点米カメムシ類の発生は、1970年代前半に急増した後90年代前半まで水田面積の10～20%（発生面積20～40万ha）の範囲で推移していたが、99年に発生面積が50万haを超え全国的に斑点米被害が問題となった以降は、発生面積率30%前後を保ち続けている（図-1）。また、1999年以降、斑点米カメムシ類に対して出された注意報・警報は毎年の総数で19～58件に上っており、延べ防除面積は水稻作付面積を若干上回る170～190万haに達し、水稻における最重要害虫となっている。

2001年に農水省で開催された「平成12年度斑点米カメムシ類の発生要因の解析及び今後の防除対策に関する検討会」では近年の主要種として、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、カスミカメ類2種（アカヒゲホソミドリカスミカメ、アサスジカスミカメ）並びにシラホシカメムシ類3種（シラホシカメムシ、オオトゲシラホシカメムシ、トゲシラホシカメムシ）などが挙げられた。その後2005年2月、06年1月に農水省で開かれた「斑点米カメムシ類の発生予察手法確立に関する検討会」では、重要種としてカスミカメ2種とクモヘリカメムシが取り上げられ、発生予察や防除技術開発の現在の取り組みや問題点について討議が行われた。全国的にターゲットとすべき種が絞り込まれたことで、今後の斑点米被害抑制に向けて、各地の斑点米カメムシ類発生事例、調査結果等の情報交換や比較検討がますます重要になってきたと言える。本報告ではこの3種のカメムシを中心に近年の発生動向、研究の現状や今後の課題について概要を述べる。

## I 3種の分布概要

アカヒゲホソミドリカスミカメは、北海道で斑点米被害を起こす主要種として1972年に初めて報告されているが、北海道以外の地域では斑点米カメムシとは認識さ

れていなかった。しかし、新潟県では1994年以降予察灯への本種成虫の誘殺数が高いレベルで推移し、個体数の増加と分布の拡大が認められるようになった。特に1999年は、青森県、秋田県、山形県、新潟県など北日本の日本海側を中心に斑点米を多発生させ甚大な被害をもたらし、現在も北日本から北陸地域における斑点米カメムシ類の主要種となっている。アサスジカスミカメは1980年代前半に宮城県、広島県で被害が報告され、90年代に入り岩手県でも斑点米を発生させる主要種であることが報告された。現在は北海道道南地域を北限に、九州まではほぼ全域に分布が確認されている。北陸地域でも2003年ごろから急激な分布域の拡大が認められ、今後の発生に最も警戒を要する種となっている。またクモヘリカメムシは西日本全域から関東・南東北の太平洋側に分布しているが、福島県、宮城県南部でも被害が報告され、分布域の拡大傾向が懸念されている。

## II 未解明な発生増大の要因

斑点米カメムシ類発生量並びに被害増大の要因については、転換田への飼肥料作物などの導入やイネ科牧草の雑草化、休閑田の増加（イネ科雑草地の増加）、水稻品種や気象条件の変化などが挙げられている。

飼肥料作物面積と斑点米発生量との間には正の相関が

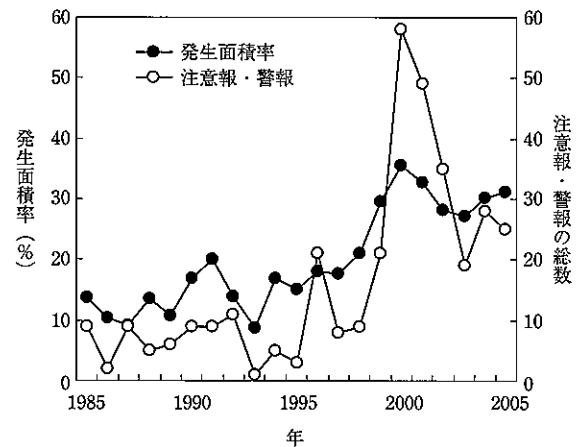


図-1 斑点米カメムシ類の全国発生面積率と毎年出される注意報・警報の総数の変化

Recent Occurrence and Problem of Rice Bugs. By Tomonari WATANABE and Hiroya HIGUCHI

(キーワード: 水稻, 斑点米カメムシ, アカヒゲホソミドリカスミカメ, アサスジカスミカメ, クモヘリカメムシ)